

井口 高志著

認知症社会の希望はいかにひらかれるのか ケア実践と本人の声をめぐる社会学的探究

私は現在、大学に勤務

する作業療法士であるが、以前は介護老人保健施設に勤めていた。その頃出会った本が井口高志著の『認知症家族介護を生きる 新しい認知症ケア時代の臨床社会学』（東信堂）であった。当時、入居者には六五歳未満の比較的若い年齢で認知症になった方もいて、

家族が以前のその方との変化に戸惑いを感じて今後共に生活するか否か迷っている様子を、当たり障りのない対応しか思い浮かばず不甲斐なさを感じたりしていた。その本は家族介護に焦点を当てており、デイサービスなどの外部環境における認知症の人の「人間性」の発見は、家族にとって希望の感覚につながる可能性がある」と書かれており、認知症作業療法における一つの解答をもらえ

た思いだった。

その後一〇年を経て、ふたたび著者より認知症を素材に本書が出版され、二点について嬉しい思いがした。一つは、著者の認知症に関わる研究者の確かな歩みと厚みを認認できることである。もう一つは、この一〇年程で、認知症の本人の「思

複雑化した認知症の時代的変容を紐解く

社会学者の精緻なまなざしがみつめる希望

田 島 明 子

い」に触れる機会が増え、作業療法においても支援のあり方は大きく変化しているように感じているが、この状況をどのように咀嚼し、未来に続く道として拾えるものは何だろうかと混沌とした思いで眺めていた。そこに、著者の精緻な社会学

的な分析によって、認知症の本人の声をめぐる過去にさかのぼった現状分析と未来の構想について書かれた本書が現れ、とてもタイムリーなタイミングだったのだ。

さて、本書の紹介を簡単にすると、まず、序章において、医療や福祉の仕事ではない社会学にできることとして、「何もわからない」「多大な負担のかかる」「人として認知症の人が扱われてきた時代から、認知症の人の

は、一九八〇年代、一九九〇年代における先駆的なケアの特徴について医療と生活の接合性から浮きぼりにし、認知症の人の「思い」の現れの仕方をとらえている。第四章

では、二〇〇〇年代中頃の先駆的なケアを行うデイサービスでの実践を紹介し、「若い衰えの全体を引き受ける」実践のあり様について検討をしている。第五章・第六章では、認知症の人の「思い」の語りの現れから、

と、三つめは、「進行」をめぐる重要な他者である家族とのやりとりの経験の機微を言葉に乗せ見えるようにすること、である。それらは認知症の後景にいる私たちが示しうる認知症を包摂した新しい社会に向けた希望の根拠になることを最後に指摘する。

本書を読み終えて、自分として何ができるかを考えたい、考えられると思った。本書における熟考を重ねた深い投げかけは、「媒介」である私たちが、認知症の人の「思い」を聴き、それに呼応し、何ものかを具現化する、そうした力を私たちが自身が備えているという確信の感覚をも同時に与えてくれているように思われるのである。（たじま・あきこ 湘南医療大学保健医療学部教授・作業療法理論・障害学）

★いぐち・たかし 東京大学大学院人文社会学系研究科准教授・医療社会学・臨床社会学。東京大学大学院人文社会学系研究科博士課程修了。博士（社会学）。共著に『被災経験の聴きとりから考える 東日本震災後の日常生活と公的支援』。一九七五年生。



四六判・284頁・2800円
晃洋書房
978-4-7710-3293-4
TEL. 075-312-0788

第一章では、認知症の理解と包摂の流れを歴史的なトピックから概観し、第二章・第三章で

と経験の拮抗関係についてなお、認知症の人の当事者経験を重視するこ